
向かい席の彼女の恋

石里ゆえ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

向かい席の彼女の恋

【Nコード】

N0667BA

【作者名】

石里ゆえ

【あらすじ】

睦美の目の前に座るのは、ちょっと困った存在であるお局様。

ある日、そんな彼女が転任してきた男性に恋をして……。恋で変わっていく女を、恋で変わらない女の視点で見た物語。

第1話

またか。さやまむつみ 狭山睦美はパソコンのモニタの向こう側で激しく咳き込んでいる西川聡子にしがわさとこを半ばうんざりと見やった。

数年前、社内で集団インフルエンザが発生したのをきっかけに、咳やくしゃみをするときはハンカチで口を押さえる、ひどいときにはマスクを着用するといった『咳エチケット』が推奨されるようになったが、彼女にそんなものは通用しない。むしろ豪快に、周囲に撒き散らすかのように咳き込み、くしゃみを連発する。それも毎年一冬中、続くのだ。アレルギーなのか、何かもつと別の病気なのかは知らないが、周囲の人間にとつてはたまらない。

時折、モニタを飛び越えて、睦美の顔に冷たいものが飛んでくると、冗談抜きにぞつとする。

社員食堂の掲示板にも咳エチケットに関するポスターが貼ってあるのだから誰か注意すればいいのだが、彼女に注意できる者は残念ながらいない。彼女の気分を損ねることを言えば、きんきんとヒステリックな声で倍返しどころか、四、五倍は返される。挙句、しばらくの間は根にもたれる。それが分かっているから、面倒くさがって上司さえ彼女に意見しようとはしないのだ。

彼女がなぜそこまで強気でいられるのかといえば、ひとえに社歴だろう。睦美は入社十年目の中堅社員だが、聡子はその比ではない。世間で言うところのお局様おぼろさまだ。年齢よわいは四十なにかし。

むろん社歴や年齢でお局と決め付けられるわけではないし、実際お局化していない彼女と同世代の女性社員も多い。前に聡子と同期だという女性と一緒に仕事をしたこともあるが、頼りになる素敵な先輩だと思った。要するに個人の資質の問題なのである。

誰も注意できないからといって睦美はあきらめなかった。一日の三分の一以上を過ごす職場環境のこと。そう簡単にはあきらめられない。それに一番被害を被っているのは目の前に座る睦美なのだ。

悩んだ挙句、態度で示し、本人に気付いてもらおうと考えた。聡子が咳やくしゃみをしたときに、睦美のほうがつさにハンカチで鼻と口を覆うのだ。しかし、聡子はその行為に含まれるメッセージにはとんと気付かず、あろうことか「あら、狭山さん。つわり？」などとまったく笑えない冗談を吹っかけてきたのだった。

これには睦美も返す言葉もなく、肩を落とすほかなかった。

もっとも、聡子の問題はそれだけではない。たとえば、まわりがあつと驚くような服装で出社したりする。レオパード柄の超ミニスカートの生足だったときはさすがに皆ドン引きだった。いくら内勤で客先へ出かけることがないとはいえ、あんまりだった。彼女の辞書には『咳エチケット』だけでなく、『ドレスコード』という文字もないのだ。

あとはお局としてはかなりベタな若手社員いじめ。もちろん女子限定だ。事務処理がメインの聡子とは違い、睦美は営業担当のため直接いびられたことはないが、犠牲者は何度となく目になっている。見たくなくとも、座席が真向かいのせいで視界に入ってしまうのだった。

先ほどから咳き込み続けている聡子をちらちらと見ながらメールを打っていると、見知らぬ男性がそばへやってきた。背は高く、精悍な顔つきをしている。イケメンといってもいい。

「お仕事すみません」

彼はおもむろに声を張り上げた。声の大きさと視線から、睦美だけでなく、もっと広範囲に向かって話しかけているようだった。実際、十人ほどが手を止めて、彼を注視している。聡子の咳も止まった。

「今日から隣の部門でお世話になることになった橋本悠一です。以前は丸の内支店にいました。分からないこともあるかと思いますが、よろしくご指導ください」

落ち着きのある良い声だった。しかも、支店から本社への異動といえ、睦美の会社では出世コースだ。

睦美は橋本の頭のてっぺんから靴の先まで素早く眺めた。年は三十歳くらい。結婚指輪は見当たらない。スーツの上からでも引き締まった身体つきが分かるところをみると、恐らくなんらかのスポーツをやっているのだろう。

別に値踏みするつもりはないのだが、営業という職業柄、相手を観察するクセがついているのだった。

挨拶が終わり拍手に包まれると、女子社員のごそそとした黄色い声が漏れ聞こえてきた。それも一人や二人ではない。

睦美の会社には女性が多く、男性もいるにはいるが年齢層が高いし、既婚者も多い。そんな中、イケメンで将来有望な独身男性がきたとなれば、皆寄ってたかるのが当然で、驚くことなど何も無い。

そう　驚くことはないはずなのだが、睦美はふと目にした光景に心底驚いていた。

あの聡子がハンカチで口元を押さえたまま、瞬きもせず橋本に熱い視線を送っていたのだ。しかも、こほこほと可愛らしい咳をしている。先ほどまでの豪快さはどこへいったのか。

若手の女子社員が期待に胸を膨らませて騒ぐのは分かる。しかしよりによって聡子までもが虜になるとは考えもしなかった。別に年齢云々の問題ではない。今は年上ブームだというし、もし聡子と同期の女性が彼と付き合ったとしてさして驚かないだろう。

聡子だから、睦美は驚いているのだ。

普段から傍若無人な振る舞いを見ているせいか、彼女が自ら他人に興味を持ち、他人のために変わるなどありえないと心のどこかで思っていた。彼女は相手を気遣ったり、話題を合わせたりするタイプではない。だから彼女の恋人の条件は、相手のほうが彼女に興味を持ち、尽くしてくれることだろうと勝手に考えていた。どんなわがままでも聞いてくれる男。聡子の相手はそのくらいでないとな務まらない、と。

それがどうだろう。目の前の聡子は十歳以上も年下の男にすっかり心を奪われている。

睦美はもぞもぞとお尻を動かして椅子に座り直すと再びキーボードに指を置き、しばしその姿勢のまま静止した。思いもよらぬ光景を目の当たりにしたせいですっかり調子が狂ってしまったのだ。

聡子とはいえば、いまだハンカチを手放さず、口元に添えたままだ。その類は心なしが赤い。まるで十代の少女のようだった。

うん、まあ、一時的なものだろう。睦美は思った。

二、三日もすれば、いつものお局・聡子に戻るに違いない。そう自分に言い聞かせ、メールの続きを打ち始めたのだった。

第1話（後書き）

3部に分けて掲載予定です。引き続きどうぞよろしくお願いいたします。

第2話

睦美の予想に反して、一週間が過ぎても聡子の様子はおかしなままだった。

毎日、レースのハンカチを持って、「くしゅん」とか「こんこん」とかごく控えめに咳やくしゃみをする。おかげで冷たいものが空から降ってくることはなくなった。

が、彼女の変貌ぶりはそれだけではない。

まず、服はすべて買い換えたのではないかと思うほどに変わった。その身にまとうのは女性らしいドレープのきいたワンピースや、シックな色合いのスーツなど、今まで見たことのない服ばかりだ。メイクカラーも派手目のものから、落ち着いた深みのあるものへと変わった。それだけで見た目の印象は相当違う。人間に値段を付けられるなら、ちよっとプレミアが付いた感じた。

加えて、驚いたことに職場の若手社員に優しくなった。しかも女子にも分け隔てなくだ。分からないことは丁寧に教え、困っている人を見かけたら助け舟を出す。そればかりか美味しいお菓子を見つけたのと言っては配り歩いている。

今まで嫌味だの、若手女子へのいびりだの、ヒステリックな説教だのが当たり前だった人とはとうてい思えない。まるで別人だ。

一体、どうしちゃったんだろう。睦美はモニタごしに聡子を観察しながら、首をかしげた。

もつとも、どうしたもこうしたもなくその答えはひとつしかない。すべては恋する女心のなせるわざだ。言うなれば、乙女心。

聡子がそんなものを持ち合わせていたのかとか、ちよつと気味が悪いとか、そんなものは偏見だと睦美は自分を戒める。

恋する権利は年齢や性別、容姿に関係なく、誰にでもある。それが叶うかどうかは別として。そして恋というのはどうやら理屈ではないらしいということも知っている。世間一般のカップルを見てみ

れば、彼らは自分に釣り合うとか、見合うとかそんなことで相手を選んでいるわけではない。

だから、聡子が十歳も年下の男相手に恋に落ちたとしても、何ら不思議なことではないのだ。そしてその恋で彼女が変わったとしても、それ自体悪いことではない。

ちゃんと分かっているのに、睦美には靴を左右履き間違えてしまったような違和感がどうしても拭えない。別の誰かが聡子の皮をかぶっているのではないかとつい勘ぐってしまう。

それは多分、恋愛で人が変わるということが睦美にはピンとこないせいだ。恋をしたことがないわけではないが、いつもそれは他人事のようにだった。自分は透明のガラス瓶の中に入っていて、すべてはその外側で起こっている。そんな感じだ。自分の気持ちすら例外ではなく、恋する自分をガラス越しにじっと冷静に見ている自分がある。当然、恋にのめり込めるはずもなかった。

付き合ったある男は「君との距離が縮まらない」とドラマのような台詞を口にして、自ら遠ざかっていった。

そんな睦美に、聡子の気持ちを理解しろというほうが無理な話なのだ。

恋する女として、すっかり変わった聡子だったが、その恋は一向に進展する気配を見せなかった。

というのも、聡子は陰から橋本を見つめているだけで、積極的な行動には出ていないようなのだ。一回だけ、コピー機の紙詰まりで困っていた彼を手伝っていたのは見かけたが、接点といえばそれくらいだった。

お菓子を配るときは、必ず彼のいる隣の部門まで足を延ばしているのが少しいじらしかった。

第3話

昼休み、後輩の山本と佐々木に誘われて近くのイタリアンレストランへ行った。聡子も一緒だった。ランチメンバーとしてこの四人が顔を突き合わせるのは初めてのことだ。そもそも彼女たちは、新人の頃、聡子に手痛い洗礼を受けたこともあり、ずっと聡子を敬遠していた。特に三年目社員の山本には作った資料を目の前で破られたという結構悲惨なエピソードまである。

そんな二人が聡子を誘うということは、彼女が丸くなって近寄りやすくなったせいもあるかもしれないが、間違いなく橋本のことだろう。橋本とのことを聞き出すつもりなのだ。それが分かっているから、ランチの誘いを断りきれなかったことが悔やまれる。睦美はそのレストランで供されるボンゴレ・ビアンコが好物なのだ。つい食べたい一心で誘いに乗ってしまったのだった。

冬の穏やかな日差しが差し込む気持ちの良い窓際の席に座り、パスタが茹で上がるのを待ちながら前菜をつつく。前菜は生ハムとルッコラのサラダ。後輩たちが「おいしー」ときやあきやあ言うのを聞きながら、のんびりと味わう。

「そういえば、西川さん。橋本さんとはどうなんですかあ？」

なんの前触れもなく山本が切り出した。「そうそう。どうなんですかあ？」佐々木も山本に同調し、甘ったるい声を投げかけた。二人ともチェシヤ猫のような悪戯っぽい笑みを浮かべている。

突然のことに聡子は前菜を喉につつかえそうになり、慌てて水を飲んだ。

「なんなの、急に。それになぜ橋本さんが出てくるの？」

「えー、だって。西川さん、橋本さんのこと絶対気になってるじゃないですか。ぶっっちゃけ好きなんですよね？」

「ええ？」

最年少の佐々木が若さにまかせてか、聡子ににじり寄る。いくら

なんでもぶつちやけすぎではないかと、睦美は内心ひやひやしてしまふ。つい先日まではお局の存在に怯えていたくせに相手がちょっと優しくなったら、すぐになれなれしくなる。若者の順応性には驚かされるばかりだ。それとも佐々木が特殊なのだろうか。

「何を言ってるの、あなたたち。橋本くんはただの同僚、ううん後輩よ。歳だつて離れているし」

ようやく出てきたパスタをフォークに絡めながら聡子は否定しようとするが、残念ながら狼狽を隠し切れてはいなかった。早口すぎるし、ところどころ囁んでいる。

睦美すらごまかせていないのに、普段から噂話や他人の恋愛模様に見がない彼女たちをごまかせるわけがない。案の定、

「またまたあ、センパイつてば。隠し事はなしですよ」

佐々木が隣の聡子に肩をすり寄せる。

「そうですね。ねえ、狭山さん？」

浅利の殻を外しているところ、山本に急に振られ、

「え、なに？」

睦美は素っ頓狂な声を上げてしまった。恋にのめり込めない体質のせいか、この手の話題は得意ではない。できれば、傍観者として第三者を決め込みたかった。それに、いつお局・聡子に戻るかもしれないのだ。好き勝手なことを言つて、あとで割を食うのは真っ平だった。

「だから、西川さんは絶対橋本さんのこと好きですよ、って話です」

山本は不満あらわに語調を強め、話の概略を説明した。

ああ、面倒くさい。睦美は眉間にしわが寄りそうなのをこらえ、

「さあ、私には分からないわ。それに、それって推測でしょう？」

すつとぼけた。こういうことには関わらないのがベストだ。大人の知恵でもある。

「やだなあ、狭山さんつてば。確かにそうですね、西川さん、熱っぽく橋本さん見つめてるんですよ」。これって絶対に恋じゃない

ですか」

佐々木が横やりを入れてきた。右手で拳を作って、恋を連呼している。

「ふうん」

睦美が気のない返事をする、二人とも諦めたらしく、視線を聡子へと戻した。

「西川さん、白状しちゃってくださいよ。恋に年齢なんて関係ないんですから」

「……そういわれても」

「ガード固いですね。じゃあ、好きかどうかは答えなくていいです。でも橋本さん素敵な人だし、きつとお似合いですよお。放っておくなんてもつたいない！」

佐々木の訪問販売員のような口調に睦美は思わず吹き出しそうになった。けれど聞いていて決して心楽しいわけではない。むしろ不愉快だった。若い女というのは、概して自分勝手に残酷だ。何を根拠にお似合いとか、人に期待を持たせることを言うのだろうか。

例えば、聡子と橋本の両方の気持ちを知っていて、仲を取り持つというのであれば話は分かる。それは彼ら、両人のためだからだ。しかし今は自分たちの好奇心を満たすために、無責任なことを勝手に言っているにすぎない。

どうせ、聡子をけしかけて、様子をうかがうつもりなのだろう。あるいは笑いものにもするつもりか。

彼女たちが橋本を狙っていることは、睦美は知っている。普通ならライバルをけしかける真似なんてしやしない。結局、彼女たちは聡子に勝ち目はないと、若い自分たちのほうが有利であると決め付けているのだ。そんな傲慢さが睦美には気に食わない。若いことがそんなにすごくて、偉いことなのかと思う。いくら若くたって、磨かなければペラペラの薄っぺらな人間でしかないのに、彼女たちはそれに気付かない。

困惑した様子で食事を続ける聡子に、二人はなおも「早くしない

と誰かに獲られちゃいますよお」と囁き続けている。いい加減、神経に障り、

「ちよっと。もう昼休み終わるわよ」

佐々木と山本に腕時計を見せ付けた。二人とも「うそお」と言いながら、慌てて冷めかけの Pasta をほお張り始める。温かいものは温かいうちに食べたほうが美味しいのに、彼女たちは喋るのに夢中で全然箸が進んでいなかったのだ。

聡子はどこかほっとしたように眉尻を下げ、睦美に目配せした。どうやら感謝されているようだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0667ba/>

向かい席の彼女の恋

2012年1月8日00時52分発行